

父親は村長でした。召集令状が村に届くと、命令が下った人のところに令状を持って回っていました。ある時「俺の家からは兵隊に行くような子がいない」とこぼしたことがありました。それが頭に残っていたのだと思います。15歳で海軍飛行予科練習生(予科練)に志願しました。

予科練の訓練は厳しいものでしたが、もっと厳しかったのは規律を犯した者への罰でした。「海軍精神注入棒」というバットのような木製の棒で10回、力いっぱい尻をたたかれたことがあります。6回ほどで意識を失うほどでした。ある予科練生は「家に帰してもらいたい」と申し出たため、棒で50回も殴ら

駒ヶ根市小町屋

高坂保さん 96

れて死にました。遺族には「名誉の戦死」ということで遺骨が渡されたそうです。「バットで殴り殺しておいて何が名誉の戦死だ」と憤ったことを覚えています。それでも何も言えませんでした。言えれば私も殺されていたかもしれません。



復員船の航海士を務めた経験から「戦争は二度と起こしてはいけない」と強く訴える高坂さん

も同じ思いでした。戦争一本の教育の下で育ちましたから。ですが「これで戦争に行かなくて済む」と安堵する気持ちも実はありました。戦後は実家の農家を手伝っていましたが、間もなく「復員船に乗らないか」という話をいた

悲惨さ、復員船の航海士務め痛感

まだ方もいました。女性はある男暴行された。女性である人たちは、性的暴行を受ける恐れがあったのです。

航海士時代は戦争のむなしさを嫌う気持ちで知られていましたが、同時に教育の大切さも学びました。復員船の艦長が「日本が戦争したのは教育が悪かった。国が教育を支配して戦争に回らされた」とおっしゃいました。その言葉に感銘を受け、教育を志しました。

今を生きる人たちは多様な価値観を認め合えるような社会をつくりたいと思っています。おとなしい人ばかりでなく、血性のある人ばかり、それを認め合える社会です。そうした社会になれば戦争はいつまでもないと思えるのです。(聞き手・野村知秀)

二〇二五

たき 1945年12月から復員船の航海士になりました。最初に訪れたのは南大東島でした。そこでは兵隊さんたちを乗せましたが、皆、腕や足など体の一部が吹き飛んでいました。戦争の悲惨さは戦中よりもむしろ、戦後の復員船に乗った時の方がより強く感じました。戦争なんて絶対にやるべきじゃない。そう強く思いましたね。その後は上海、釜山、注文津(チムンジン)と続き、最後は満州の葫蘆島に行きました。葫蘆島では、満州開拓に関わった皆さんがほとんどでした。逃げてくるまでにあつた悲惨な話をたくさん聞きました。終戦後もあちらこちらで攻撃を受け、塹壕に身を隠しながら命からがら逃げて